

。ときめきリーフノベル

## タイムマシン

文・高安義郎  
絵・芝 章一

大学もそろそろ卒業だと言う頃だった。昇平は急にタイムマシンを考え始めた。それというのも時間を戻したいわけがあったのだ。

知り合って半年になる鈴葉と将来を考えた付き合いがしたく、ある時意を決し公園に呼び出し「将来を」と言いかけたものの、つまらない冗談しか出ず、それっきり彼女とは半月も会っていない。

あの時間にもう一度帰りたい。そう思ったのがきっかけだった。

様々な文献を読み、親友の和馬に協力を頼むと、和馬は、「漫画じゃあるまいしタイムマシンなんか、できっこないさ」  
そう言って一蹴された。

「どうして？」

口を尖らせて聞くと、「タイムマシンで過去に戻り、間違っ  
て先祖を殺したとしたらどうなる。先祖がいなければ自分は生まれません、

生まれなきゃあ先祖は死ぬこともない。物事は科学的に考えなきゃ彼女だって出来はしないぜ」

彼女ができないと言われ、科学的思考が得意には必要だと悟ったが、それならばなおのことタイムマシンが必要に思えた。

アインシュタインの理論からすれば、時間旅行は否定されていないし、運動する物体は時間が遅くなると言う。光速と同じなら時間は停止し光速を越えれば時間は逆戻りするともいう。

そもそも時間が伸び縮みするのだろうか。まずはそれを確かめたい。だがそんな早い乗り物を作る技術もなければ金もない。ふと昇平は考えた。

地球は音速の早さで自転して太陽の回りを一年で約四億八千万キロまわる。その速度は毎秒三十キロだ。更に銀河系は直径十光年の楕円をすごい早さで回転している。これらを合算すれば光速に近づけるのではないか。ならば天体の運動を逆手に取る方法を考えれば、簡単に過去に戻れるかも知れない。

だが運動する物体は本当に時間が縮むのか、まずそれを試そう。そう考えると昇平は、

「実験をするから来てくれ」  
と和馬を呼び出し、高校時代に乗り回

していたバイクを引っ張り出した。そして人通りのない里山への坂道を走り出した。

一杯アクセルをふかすと遠くに霞んでいた池がみるみる大きくなり、運転しながらちらりと腕時計に目をやった。とその時昇平はバイクごと宙に浮かび、芦の茂みの中に叩き落とされたのだ。

痛みをこらえて立ち上がりながら時計を見ると、鈴葉と公園で待ち合わせた日の十分前を示していた。やはり時間は戻るんだ。気をよくした昇平は急いで彼女が待っている公園へ走った。不思議にも公園はすぐ池の脇にあった。運動する物体は空間が縮むというアインシュタインの説はまさに正しい。そんな事を思いながら公園にゆくと、果たして彼女は待っていた。だが昇平は、やはり何も言えず、  
「非科学的な人って手探りで生きていくようにしか見えなくて不安だわ」  
そう言って鈴葉は消えてしまった。過去に戻っても何も変えられなかった自分がかっかりしながらふと目を開けると、そこは病院のベッドだった。

「昇平、やっと気がついたか。バカだなあバイクで事故りやがって」  
包帯だらけの顔を覗きながら言ったのは、見舞いに来ていた和馬と鈴葉だった。

「あのなあ昇平、ロケットで飛んでも、時間は千分の一秒も遅くなんないんだ。それに動いている物自身の時間が変動するだけで、宇宙全体には関係ないんだ。浦島効果って知ってるだろう。時間が停止していたのは浦島だけだっただろ。お前みたいな科学音痴の男に彼女はついてこれねえだろうな。そう思うだろ鈴葉君も」

鈴葉に目配せしながら言った。すると鈴葉が言った。

「和馬さんみたいに何でも科学科学的って言う人、夢がないわ。非科学的な夢がいつか現実の夢に結びつくものよ。ライト兄弟だって空を飛ぶなんて夢みたいな発想から始まったんだわ。だから私、昇平みたいな人の方が好き。一緒に夢と現実のギャップの中で楽しく暮らそうね」

鈴葉の言葉に昇平は嬉しくなり、「結果的には時間が戻せたみたい」  
そんな事を吹き、痛みが却って心地よいものに変わって行くのを感じるのだった。

